

# 本田一弘

## いのちの言葉

二〇一七年の一月一日から十二月三十一日まで毎日一首ずつ、ふらんす堂のホームページに掲載されたものをまとめた第十五歌集。私はそのページが毎朝更新されるのを楽しみにしていた。短歌作品はもちろんだが、一首に付された短い文章が味わい深い。忙しい日々を送る伊藤一彦の三六五日も手に取るようにわかる。そして装幀のセンスが抜群だ。濃い緑地にレインボー箔で虫が描かれ、光り輝いている。帯には四月十五日付けの「天よりの光を容れてみじろがず新なる白の山芍薬の花」が記される。スケールが大きくて、しかも小さないのちにもまなざしを注ぐ伊藤らしい「光」の一首だ。「あとがき」に「私の住む宮崎県自体が光の庭である」とあって、題名にも使われているくらいだから「光」の歌が実に魅力的なのだが、この稿では「言葉」に焦

点を当てた歌を紹介しようと思う。なぜなら「言葉」が生き生きと光っているからだ。

- ・ 日日欠かすことのあらざる晩酌をだれや  
みと言ふ 時に「だれ」増す
- ・ タマガツタ、タマゲルといふ宮崎弁 古語の魂消ると知りてタマゲヌ
- ・ 中央の「大和」にあらぬ矢的なり月の光の矢をうけてゐる

- ・ 他の入居者「希望」や「光」わが母は「まこち、のさん」と堂々書けり
- ・ わが父は「のさん」などは生涯に一度も言わぬ肥後モッコスなりき

まずは宮崎の言葉。宮崎の風土が生んだ言葉を誇りつつ、あたたかく見つめ、その言葉が使われている日常をユーモアたっぷりに歌う。そして亡くなった父母を彼らの話していた言葉を通じて偲び、懐かしむ。

- ・ 加賀谷氏の話すガギゲゴ 温かく人なつつこくて奥深きなり
- ・ 親愛の情をあらはす接尾語の「こ」のあたたかさ土のほひす

この年、「心の花」の全国大会は秋田で行われたが、伊藤は「風土と短歌」と題し

て講演し、斎藤茂吉の短歌と風土との関わりを話した。加賀谷氏は秋田在住。秋田をはじめ東北の風土が生んだ言葉にも関心を寄せて、「温かさ」を見いだしている。

- ・ 牧水の眼もてながめ牧水の耳もてきかむ水のいのちを
- ・ みなかみに牧水の耳ききとめし光の声と

言葉をおもふ

今や若山牧水といえは伊藤一彦だろう。伊藤の身体は牧水の「眼」や「耳」と化して自然を見つめ、その声と言葉に寄り添う。

- ・ 人つなぐはずの言葉が人と人分断「ポスト真実」の今
- ・ 「生命」は目に見えて有りさりながら触れ得ず見えぬ魂きはる「いのち」

伊藤の言葉は、温かく人と人をつないでいる。いや人どうしばかりではない。伊藤の身体から生み出された言葉によって紡がれた歌は「ポスト真実」という言葉が蔓延する殺伐とした現在の世界において目に見えるもの、見えないものも含めた存在そのものを大きな力で包み込む。「言葉」そして短歌という表現形式の豊かさ、そして今この世に生きる「いのち」としての喜びを

十二分に味わうことのできる一冊だ。